

Asexual であるという自覚はいかにしてなされ自己受容されるのか？

—ライフストーリー・インタビューによる事例から—

吉岡真梨子¹

(2019年1月8日 受理)

How Occurs the Awareness of and the Acceptance of being Asexual?

—Case study by life-story interview—

Mariko YOSHIOKA¹

Abstract: The purpose of this study was to examine a process of self-awareness of being Asexual by conducting a life story interview. We also examined how accept it was done. Asexuals are those individuals who are low on attraction for both sexes (Storm, 1980). A woman, who is asexual and hetero-romantic (called nonsexual in Japan), was interviewed for a few hours. She feels romantic feelings towards opposite sex. As a result of analyzing the narrative contents, the contents related to gender were summarized mainly in "romance", "study abroad", "coming out", "future uneasiness and prospects", "relationship with friends". As a process of self-awareness in Asexual, it was thought that there are the following two stages. It is (1) to recognizing gaps with surrounding values and thinking, through romantic experiences etc..., (2) to know the term Asexual, or to know the existence of other asexuals. As for self-acceptance, it was inferred that in the case of A, it is often done at the same time with self-awareness.

Key words: asexual, gender-identity, self-acceptance, narrative

キーワード: アセクシュアル, ジェンダー・アイデンティティ, 自己受容, 語り

問題と目的

多様なジェンダー・アイデンティティ 近年では、日本においてもジェンダー・アイデンティティの多様性について取りあげられるようになった。特にLGBTという言葉については、ニュース等で目にする機会も増えたのではないだろうか。LGBTとは、女性同性愛者であるレズビアン (L)、男性同性愛者であるゲイ (G)、両性愛者であるバイセクシュアル (B)、そして心と体の性別が一致しないトランスジェンダー (T)、それぞれの頭文字をとったものである。主に性的マイノリティを表す言葉として用いられているが、LGBT以外にも性的マイノリティは存在しており、まだ自分の性的指向や心の性別がはっきりしていないクエスチョニング (Q) や、男性と女性両方の生殖器や、性別が明瞭でない性器をもって生まれる性分化疾患 (I) などもある。吉岡・坂谷 (2017) によれば、性別には、からだの性・解剖学的性別と呼ばれるような生まれたときの身体的特徴から判断できる性、心の性・性自認と呼ばれる性別の自己意識、性的指向・好きになる性といわれる恋愛や性愛の対象となる性、服装や行動などで表現する性など、多様な性があるといわれている。このような多様な性によってジェンダ

¹ 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

ー・アイデンティティは構成されているのである。

Asexual とは 多様な性やジェンダー・アイデンティティのひとつに、Asexual がある。性的指向の理論を提案した Storms (1980) によると、Asexuals とは、両方の性（異性と同性の両方）に対して性的欲求が低い人を指す。すなわち、他人に対して性的魅力をほとんど、もしくはまったく感じない人 (Mardell, 2016 須川訳, 2017) のことであるといえる。Bogaert (2004) においては、サンプルの約 1% ($n=195$) が誰にも性的指向をもっていなかったことが明らかになっている。また、Storms (1980) の定義にふれ、Asexuality の概念について取りあげた Bogaert (2006) は、Asexual の定義について以下の点に注意するように述べている。必ずしも性的なふるまいをしない、または Asexual としての自己認識があるわけではないこと、性的刺激に対する関心は非常に低い可能性があるが Asexual のほとんどが欲求をもたない (例えば、自慰行為をしない) ことを必ずしも意味するものではないこと、肉体的な生殖能力をもたないことを必ずしも意味しないこと、他者のために愛情のある行為をしないことを意味するとは限らないことである。これらの注意点からわかるように、Asexual といってもその個人のあり方には差が大きいといえる。また、上記の Asexual の定義について整理すると、他者に対して性的欲求をもたないが、恋愛感情をもたないわけではないといえる。なお、他者に対して恋愛対象としての魅力をほとんど、もしくはまったく感じない人については、Aromantic という別の名称があり、例えば Asexual かつ Aromantic であるという認識となる。

国内における Asexual の関連研究 日本においては、Asexual について一般的に“アセクシュアル”と“ノンセクシュアル”という 2 つの名称を用い、区別されている。この場合のアセクシュアルとは、無性愛者とも言い換えることができ、Asexual かつ Aromantic に該当する人を指す。対して、ノンセクシュアルとは、非性愛者と言い換えることができ、Asexual であるが他者（ここでは同性/異性/両性を区別しない）に恋愛感情を抱く人を指す。したがって、国外で用いられる Asexual と国内で一般的に用いられるアセクシュアルは、定義にずれがあるといえる。他方で、ジェンダー・アイデンティティの一つである Asexual について扱われている国内の心理学研究は管見の限り見当たらない。また、同様に Asexual のみを取りあげた専門書についても現在は出版されていない。そこで本研究では、これらの状況を踏まえて、アセクシュアルとノンセクシュアルをあわせた国外の Asexual 表記を採用する。

これまでの恋愛に関する研究では、青年期に入ると異性への関心や接近欲求が高まることで、親密な関係になることを求めるようになるとされている (たとえば返田, 1986)。また、若尾 (2006) によれば、発達心理学などでは、異性との親密な関係をつくるのが青年期の発達課題とされている。しかし、このような定型発達とは異なる“恋人がほしいと思わない青年”の心理的特徴や自我発達について明らかにされている。高坂 (2011) は、“恋人がいないくて、欲しいと思わない青年”を恋愛不要群と名付け、恋人が欲しいと思わない理由について尋ねた。その結果、恋愛不要群は全体のサンプルのうち 18% いることがわかった。高坂 (2011) は、過去の恋愛研究 (Dietch, 1978; 北原・松島・高木, 2008 など) を踏まえた予測どおり、恋人がいる者の方がいない者よりも自我が発達していることや精神的に健康であることを明らかにしている。更に、高坂 (2013) では、恋愛不要群について、恋愛拒否群、理由なし群、ひきずり群、自信なし群、楽観予期群に分類し、自我発達の比較を行なった。その結果、恋愛拒否群や自信なし群は全般的に自我発達の程度が低く、理由なし群は中程度、なりゆき群やひきずり群は比較的高く、特に楽観予期群は得点が高かった。この恋愛拒否群や自信なし群は、恋愛に対する自信がなく、また恋愛する意義もわからない青年であったと述べられていることから、Asexual に該当していた可能性も考えられるだろう。しかし、高坂 (2011, 2013) の研究では、恋人がいるかどうか、欲しいかどうかという観点から検討されているため、恋愛と性愛は区別されておらず、Asexual 当事者が含まれていても明確にはどの群であったかわからない。また、恋人がいるまたは欲しいと回答した人の中にも Asexual がいた可能性は考えられる。したがって、Asexual について検討するためには恋愛と性愛を区別し、両観点から発達や精神的健康について取りあげることが重要であるといえる。

日本における Asexual に関連する研究は初期段階にあることを踏まえると、いつどのようにして自覚し受容していくのかといった発達のあり方などについて、探索的に検討し、知見を積み重ねていく必要がある。高坂 (2013) において、恋人が

欲しいと思うか否かや、欲しいと思わない理由には、青年期以前の心理社会的危機（基本的信頼感や自律性）や青年期以降の心理社会的危機（親密性や生殖性）などが関わっている可能性が指摘されている。また、内藤（1994）によって、恋愛や性行動の解明のためには、個性をもった独自の体験をする個々人の、時点時点での態度（イメージ）構造の個人別分析という視点も欠くことができないことが述べられている。このことから、恋愛や性行動が軸となり、個人差の大きい Asexual についてもまず個人の体験であるライフストーリーに着目し、質的に検討を行なっていくことが重要であるといえるだろう。

本研究の目的 本研究は Asexual 当事者を対象とし、面接を通してライフストーリーを語ってもらうことで、Asexual としての自己の自覚にいたるプロセスを明らかにする。加えて、精神的健康に影響すると考えられる Asexual 当事者の自己受容についても、どのようにしてなされたかを検討する。

方法

協力者 協力者は、Asexual であることを自覚しているという条件を満たし、かつ研究趣旨を理解した上で、直接面接を行なうことへ同意した女子大学生 1 名である。なお、協力者には次のような手続きで依頼した。LGBTs 当事者の大学生によって構成されているサークル団体の代表者へ研究趣旨を説明し、協力者の候補となる Asexual 当事者を紹介してもらった。その後、著者が個別に研究趣旨および調査手続きについて説明を行なった上で、協力を依頼した。性的マイノリティである Asexual について扱うにあたり、極めて私的かつ性的な語りにくい性質が重要な課題となるため、協力者の自発的な協力が必要不可欠である。したがって、少なくとも 1 回の直接面接および面接内容の確認と、必要に応じた追加面接に対し積極的に応じることを協力者の条件とした。この条件に同意したことから、協力者はこれまでに語り難いほどの否定的な体験はしていないことが予想された。

調査手続き 協力者に対して一対一で、著者が下記のような半構造化面接を実施した。なお、面接の実施場所については、協力者がリラックスして参加できるよう、商業施設にある周囲に会話が聞こえない個室を利用した。面接は、協力者のライフストーリーを語ってもらうことを軸とし、Asexual に関わりのないと思われる内容についても自由に語るよう依頼した。協力者が語り終えた時点で面接終了としたため、所要時間は 2 時間半程度となった。

面接ではまず、協力者の緊張をほぐし、かつ協力者について知るために、“最近の生活”について尋ねた。その後、“これまでの人生”として、紙媒体の年表を使用し、学校経歴を確認、適宜情報を加筆しながら、その時代区分（幼稚園時代、小学校時代、中学校時代、高校時代、大学時代）について時系列に沿って、重要な出来事や印象に残っているエピソードなどを語るように依頼した。学校経歴に沿った時代区分を用いることで、協力者がエピソードを想起しやすいようにした。次に、“転機となった出来事”について、記入した年表を参考にしながら、確認を行なった。この“転機”とは、人生の方向を決めたり、人生の方向を転換させたりした出来事であると協力者が認識している出来事を指す。最後に、“これからの人生”について、不安に思っていることや期待していることなどを語ってもらい、面接を終了した。面接では、協力者の自発的な語りを重視しつつ、学校関連、家族関連、恋愛関連といった視点から語りを整理するような質問やフィードバックを行なった。協力者からは面接中「新しい自分に気づいた」等の感想があり、研究協力に対して肯定的な反応を得られた。

倫理的配慮 協力者には、協力依頼時と面接当日に研究趣旨および調査手続きについて説明を行なった。また、個人情報とデータの取扱いと調査者の権利について十分に説明を行なった上で、同意を得た。具体的な説明内容は、面接中に音声を録音すること、プライバシーを厳守したうえで面接の記録を学術論文等で発表することなどが挙げられる。さらに分析にあたり、録音した面接内容を文章化し、見出しをつけて再構成したデータについて、内容に間違いがないか、内容から個人が特定される箇所の修正に問題はないか等、協力者自身が確認できる機会を設けた。

分析手続き 以下の手続きをとりながら、Asexual をテーマとしてライフストーリーを再構成した。(1) 録音データを文章化し、逐語記録を作成した。その際、明らかな言い間違いや言いよどみ、インタビュアーの相槌や個人名などについては修正・削除し、ある出来事についての語りを 1 エピソードとみなした。その後エピソードを内容ごとにとまとめ、小見出しを付けた。(2) 逐語記録の小見出しをもとに、さらに大きなまとまりへ分類し、見出しを付けた。(3) 見出しに基づいて、Asexual に関連するエピソードを含むジェンダーについての内容と、ジェンダー以外のパーソナリティに関連する内容

の2種類に分類を行なった。(3) 本研究の目的に基づき、Asexualに関連するエピソードを含むジェンダーについての内容に焦点をあて、見出しごとに時系列に沿って配置したうえで、語られた出来事から“Asexualの自覚と受容”について検討を行なった。

結果と考察

1. 協力者の基本的なプロフィール

協力者(以後Aとする)は、面接時23歳で、大学4年生であった。約1年間の留学を経験しているため、大学生活は5年目となる。家族構成は、父、母、兄2人、Aである。Aは現在、自身がAsexualであることを自覚しており、LGBTs当事者の大学生により構成されているサークル団体に参加するなど、Asexualであることに対して肯定的な姿勢がみられる。AはAsexualのなかでもノンセクシュアルに該当し、他者に性的欲求を抱くことはないが、恋愛感情を抱くことはあると自覚していることが明らかとなった。A本人がAsexualという海外における定義を使用し、重要視していることから、本研究ではAをAsexualとして紹介する。

2. エピソードのコード化

分析の手続きに従い、ジェンダーに関する内容は、主に“恋愛”、“留学”、“カミングアウト”、“将来的な不安と展望”、“友人との関わり”という見出しによりまとめられた。また、ジェンダー以外のパーソナリティに関連する内容は、主に“家庭環境”、“交友関係”、“他者評価と関わり方”、“自己評価”、“習い事や趣味”という見出しによりまとめられた。

3. エピソードの紹介と意味づけ

Asexualの自覚と受容について検討するため、ジェンダーに関する内容をとりあげ、特にテーマと関連したエピソードのもつ意味を明らかにする。なお、ジェンダー以外のパーソナリティに関連する内容についても、影響を及ぼしていると考えられるエピソードについては、必要に応じてとりあげることにする。

3.1. 恋愛

“恋愛”には、“中学時の恋愛経験”、“高校時の恋愛経験”、“性的欲求と行為への感情”の小見出しがまとめられた。Aは中学時代に1人、高校時代に1人の男性と交際していたエピソードを述べ、当時の恋愛に対する価値観や性的欲求と行為への感情を語った。そこで、中学時代と高校時代の恋愛経験を軸に、それらのもつ意味を考察する。

3.1.1 各時代における恋愛経験のエピソード

3.1.1.1 中学時の恋愛経験: 中学2年の冬から高校1年の春まで交際していたことについて、「中2くらいに、カップル増殖期みたいなものがきて、そしたら恋人いるのが普通みたいになると、意識をされるとこっちも意識しちゃって、周りが付き合っているから付き合うかみたいな感じで付き合った人はおります」と語っている。付き合う際には、「ただ単に仲良かっただけだと思って勘違い」しており、親友から指摘を受けたことで、自然と付き合うことになっていたことを知ったという。Aは、「この人と一緒におったら楽しいよねとか、かっこいいよねとか話したら、『それって〇〇のこと好きじゃない?』って言われて、『あ、これが好きなんだ』って思っただけ」というエピソードを語っており、「安心感を私は好きと思っていた」と中学時代の恋愛観を振り返った。一方で、「付き合う男女がすることもなにもしてないし、ほんとただ仲良かった」と述べ、「手繋いでも、(相手は)ドキドキするみたいな感じだったらいいけど、『はあー』みたいな、『あ、そうなんだ』みたいな。」という相手とのギャップについても言及した。

3.1.1.2 高校時の恋愛経験: 高校2年の夏から大学1年の冬まで交際していたことについては、相手に自ら興味をもち、「すごく中身が成熟していて、大人な感じで。話していても自分と違う価値観をくれて、楽しくって、お付き合いしませんでした。」と語っている。高校当時の恋愛観についても、「恋愛については誰か自分を思ってくれる人が居る、まあ安心感ですよ。あと、生きやすかった。何してもダメだった時に自分を認めてくれる人がいる。」と述べ、肯定的に捉えていたことがうかがえた。その一方で、中学時代には感じていなかった違和感についてのエピソードが語られた。すなわち、親友との間で、彼氏と「どこまで進んだみたいな話」が話題にのぼった際のエピソードである。「こっちは全然進んでないから、『えっ、なんで?』って言われるのが、ちょっと違和感がありました。」と語り、「付き合ったらするのが普通

みたいになってたけど、自分はそうじゃなくて何がいけないんだろうっていう疑問」が生じていたことをAは言及した。しかし、この違和感や疑問の原因については「わかってないし、別にそれが苦じゃなかった」と述べている。「人は人じゃんとか、まだ高校生だからよくない?とか言い訳ができた」ことから、高校時代のAは恋愛に対してネガティブな感情を抱かず、違和感や疑問を抱くに留まっていた。

高校時代から交際していた相手と別れた理由について、「2年とか付き合っていて、ほんとに何もさせなかったんですよ。興味がなくて、むしろ嫌悪感しか増さんし、冷めていくのがわかるんよね。彼に向かって言えないのがしんどくて、人としてはほんともう大好きだったんですけど、男としての幸せを奪っているなあって思って、お別れしました。」と語った。Aは当時を振り返り、「その人に出会ったからこそ自分の性に対する疑問にも気づけたし、全然恋愛映画とか、恋愛漫画とか好きなので、その人と出会わなかったら自分が他者に対して(性的欲求を)抱くのかどうかって、今でも気づけなかったと思うんですよ。」と述べており、Asexualだと気づくきっかけの一つであったと認識していた。

3.1.2. 通時的変化からの考察

中学時代から高校・大学時代(留学前)までのエピソードを時系列に沿って整理し考察すると、どの時代においても一貫して“安心感”というキーワードが使われていることがわかる。恋愛に対して受動的であった中学時代において、安心感を抱くことが好きということであるという恋愛観を獲得したAは、高校時代には主体的に交際関係を望むようになっており、より恋愛に対して肯定的な感情を抱くようになっていたと考えられる。

発達段階からこの変化について考察すると、青年期に入ると異性への関心や接近欲求が高まることで、親密な関係になることを求めるようになるとされており(たとえば返田, 1986)、Aも異性への関心が高まるという点ではこの発達に沿った変化を経験したといえる。しかしその一方で、Aは中学時代には顕在化していなかった性的欲求と行為に関する周囲や相手とのギャップについて、高校時代以降実感するようになっている。このギャップはAsexualが経験しやすい代表的なエピソードであることが予想される。Aは「違和感」や「疑問」といった言葉を用いて語っているが、高校時代にはその原因が把握できておらず、「言い訳」ができたために悩みには至っていなかった。しかし、大学生になっても交際相手とのギャップが解消されないために、相手への罪悪感が生じており、悩みへと発展していた。このエピソードを踏まえると、Aは“付き合う”ことで親密な関係を築き、一度は青年期の発達課題を達成したものの、他者に性的欲求を抱かないというAsexualの特徴ゆえに、交際相手との心理的な距離を縮められず、結果的に自我発達が後退したと考えられる。

ギャップが生じた原因となるAの“性的欲求と行為への感情”については、Asexualであるという自覚にも深く関わる語りであると考えられるため、特に焦点をあてて記述する。なお、発達には個人差があり、性的欲求や行為に関する発達が周囲よりも遅いことにより生じるギャップも存在すると考えられる。この点に関連したエピソードについては、後述する。

3.1.3. 性的欲求と行為への感情

Aはスキンシップとして「キスは全然できるし、安心感感じるときもある」と語り、キスは「手をつなぐ安心感と一緒に」と捉えていた。このことから、キスという行為自体に嫌悪感を抱いているわけではないことがわかる。また、Aと相手との間に「下心っていうか性的欲求が向こうに混じってくると、自分は混じったことはないんで混じらないし、っていうギャップ」がうまれることについて言及し、「自分は感じたことないです、そういう感情は。」とそもそも性的欲求自体が生じないことを述べた。性的欲求が生じないことによりうまれる相手の感情とのギャップが嫌悪感につながっているといえる。この点について、他者に対して性的欲求を抱く人であっても、相手と感情が一致しておらず、双方の同意がなければ嫌悪感を抱きうる事が推測され、ギャップの生じる原因が異なることやそれに伴うギャップの発生頻度を除けば、嫌悪感が生じる過程自体は類似していると考えられる。ただし、Aは「ずっと(キス)しよったら、はぁーみたいな、動物みたいって思うんですよ、すごい。ワンちゃんが顔舐めてくるじゃないですか、なんかあれにしか思わなくなって、なんも愛情とかがないんですよ。」とも語っており、性的欲求が生じないことが、キスという行為自体への認識に対してネガティブな影響を及ぼしていることがうかがえる。Aは性的な行為について、繰り返し「動物みたい」と述べており、Asexualであると自覚するに至る重要なキーワードであることが推察された。

3.2. 留学

“留学”には、“価値観の広がり”、“学問としてのジェンダー”、“海外のAsexual当事者の書き込みへの共感”の小見出し

がまとめられた。Aは、自身の転機として大学3年時から約1年にわたる“留学”をあげ、Asexualであることを自覚した際のエピソードを語った。本研究の目的であるAsexualであるという自覚はいかにしてなされるのかを明らかにするうえで、重要なエピソードであることから、Aが留学したことに影響していると語ったエピソード“書道国際交流”，“兄たちが海外へ”もあわせて、時系列順に取りあげることとする。

3.2.1. 留学への影響

3.2.1.1. 書道国際交流：Aは5歳から18歳まで書道教室に通っており、中学時代に書道国際交流のため海外に招待された。この経験から「言葉が違う人と交流する楽しさ」や「同じ書道をしているのに、国によって文化が違うと違うんだ、同じものはずなのに違う視点から見たら違うものになるんだ」など、多様な価値観や他者に対する興味を抱くようになっており、Aは「海外のひととの交流の楽しさを知った」という点で、転機の一つとしてあげている。

3.2.1.2. 兄たちが海外へ：Aは「兄1が海外の大学で、兄2は1年間大学のときに交換留学へ行っていて、だから留学に行くのが普通だと思っていたので、じゃあ行こうみたいな。」と語っており、留学へのハードルが低かったことを述べた。また、Aは兄たちに対して「人と違うから面白い、ルールを歩んでいない人」といった印象を抱いており、「自分と違う人に興味をもつのは、兄たちの影響かもしれない」と考えていた。

3.2.2. 価値観の広がり

Aは留学前から多様な価値観や他者に対する興味を抱いていた。その下地をさらに広めたのが、留学であると考えられる。Aは留学中に「ゲイの友達」や「クリスチャンの友達」と交友があったことで、「人はみんな平等っていう価値観をいい意味で植え付けてもらって、そこからはすごく生きやすくなりました。」と語った。

3.2.3. 学問としてのジェンダー

Aは留学で印象に残ったこととして「ジェンダースタディーズ、ウィメンズスタディーズ、クィアスタディーズに出会えたっていうのが一番大きい」と語った。学問を通してジェンダーにふれたことで、「セクシャルマイノリティってLGBTしかいないと思っていたのが、もっといるんだっていうのを知って、Asexualっていうワードを聞いて、しっくりきた」という。自覚した瞬間の感情を「安心感、解放感、承認欲求満たされたみたいな感じ」であったと述べた。「どこにも属されない不安感みたいなのがなくなりました。自分をカテゴライズしてくれるワードがあるっていうのが、私にとって、社会に居場所があるっていう風に考えられて、その他のマイノリティってなんかざっとしてるけど、Asexualってあるんだ、私はそうなんだって。」という語りから、AはAsexualであるという自覚をしたと同時に自己を受容できたことがうかがえる。Aは高校時代の交際を経験したことで、「性的対象として見てないのは、まだ子どもなのか、そういう人が他にいるのか、自分がおかしいのかっていう違和感」を感じていた。しかし、留学先で学問としてジェンダーを学び、「違和感の正体がわかったことで、「違って当然じゃん、だってセクシャリティが違うんだからっていう理由づけに気づけた。」というポジティブな感情を抱くことができたのである。

3.2.4. 海外のAsexual当事者の書き込みへの共感

Aは、Asexualというワードを知ったことで、インターネット上で検索し調べるという行動をとることができるようになった。そこで「海外のアセクシャルの人のためのコミュニティサイト」を見つけ、彼らの書き込みを閲覧したことも、Asexualだと受け入れることができたきっかけだと語っている。「共感が一番強いですかね。私だけじゃないんだーみたいな。これで生きていけるっていう。しっくりきましたねえ。もやもやに名前がついた。」というように、Aは違和感から解放され、Asexual当事者の生の声へ共感できたことで更に所属感・安心感を得たといえる。

3.3 カミングアウト

“カミングアウト”には、“カミングアウトトラウマ”，“Asexualという用語なしでのカミングアウト”という小見出しがまとめられた。Aは、後述する将来的な不安から「死ぬまでにやりたいことリスト」を作っており、項目としてカミングアウトをあげた。Asexualという用語を出したカミングアウトは10人、用語なしのカミングアウトは100人を目標としており、そのうちの20人に理解してもらえたらよいと語っており、Aの中で他者からの受容は重要な意味をもっていることがうかがえる。

3.3.1. カミングアウトトラウマ：AはAsexualというワードを使ってカミングアウトした際のトラウマを語った。海外生

話が長い人であったことから、理解してもらえないのではないかと考え打ち明けたが、『でもまだそれって、君がまだ成熟してないだけかもしれないよね、その可能性もあるよね』って言われ「たため、「何であなたに決められなきゃいけないの?」と思ったというエピソードである。このエピソードは A が他者からネガティブな反応を受けたトラウマ経験であるものの、A は心中で相手に反論したことを語っており、A が Asexual であるということに対してゆらぎない自信をもっていることが読み取れる。Asexual であるという自信については、「いざそういうことになっても（性的欲求を）感じる事ができないという前提でしかもう、そういう感情を抱かないという前提でしかもう、考えられてないですね。」と述べており、どの時点でそのような自信をもつようになったのかについてはわからないと語った。また、まだ成熟していないだけかもしれないが、「今は A ですって言い切りたい。自信はどこから湧いてくるのかわかんないです。」と述べた。「結婚したい人に出会うかもしれないけど想像ができない。そう感じる事ができている自分が。だから、今は未来も A だよって自信にあふれています。」という発言から、Asexual であるかは当事者が自身を Asexual であると自覚していることが一番重要であるといえる。性自認や性的指向が変化しうことは性的流動性 (Sexual fluidity) として議論されているが、Asexual についても同様に流動性がないとは言いきれない。しかし、A の語りも踏まえると、Asexual であることを確定する条件は存在せず、Asexual であるかどうかを他者が疑うことは意味をもたないといえるだろう。

3.3.2. Asexual という用語なしでのカミングアウト: A はカミングアウトトラウマを経験した一方で、大学の先生や幼馴染たちからの受容を経験している。A は特に大学の先生へのカミングアウトについて、「重く受け止めることもなく受け入れてくれたし、恋愛していたらこうこうじゃんって言う、もうわかるじゃんみたいな感じで話さなく」なったという受容体験を語った。「偽らなくてもいい人に出会えた」喜びを感じ、「変に取り繕わなくていいやつ」思えるようになったことで、より Asexual である自己の受容と自信が強まったと考えられる。

3.4. 将来的な不安と展望

“将来的な不安と展望”には、“一人で死ぬということ”、“理解し認めてくれるパートナー探し”などの小見出しがまとめられた。A は将来展望について尋ねた際、真っ先に「長生きしている自分が想像できない」と語り、「一人で生きて行こうと考えているからだと思う」と述べた。これに関連したエピソードとして、A は現在の家族との関係について「仲が悪くなるほど仲良くない」と評価しており、将来の展望の中に家族と同居するというイメージはなかった。また、家族の話をする際には無意識のうちに足を抱えていることが多いと指摘されることを語り、「後ろめたい」と思っている可能性に言及している。家族にはカミングアウトを行っていないが、こうした家族との関係性が A の一人で生きていくという将来像を強めていることが予想される。

3.4.1. 一人で死ぬということ: A は「一人で死ぬのが一番不安」だと語ったが、具体的な不安として「物理的な一人よりも精神的な一人で死ぬほうが嫌」であることを述べた。物理的孤独と精神的孤独への言及であり、「誰かと何かを一緒にしていつて得られる安心感とともに死にたい」という A は、幸せのイメージについて次のように語った。「精神的にお互いを支えあえて、お互いに安心感を得られる相手といること」、そして「その愛に性的欲求が含まれてなかったらもう完璧」であるという。この発言から、A は“安心感”を重視しており、精神的なつながりを求めているといえる。しかし、「結婚とか考えたら、子ども産むとか絶対考えてるじゃないですか向こうは。そういう思い込みがあるから、わかってもらえないんじゃないかっていうのが強い」という諦めの感情から、「一人の将来しか浮かばない自分が不安」とも述べている。Asexual であることは、孤独感を強め、パートナー探しへの諦めを抱かせているといえるだろう。

3.4.2. 理解し認めてくれるパートナー探し: これからの人生に期待していることとして、「私を理解してくれて、認めてくれるパートナーを見つけること」を挙げた。パートナー探しへの諦めとは矛盾していることを自覚し、過去には「もうパートナーは見つけない」と落ち込んでいたが、現在は「精神的に孤独じゃない状態で死にたい」という希望から、将来的にパートナーと出会える可能性に期待していると語った。その際、“理解と認めることの違い”に言及し、パートナーには「『そういう指向なんだね、わかるよ、そういうあなたがいいんだよ』と言ってくれる」相手を求めていると述べた。

3.5. 友人との関わり

“友人との関わり”には、“友人からの異性紹介”、“友人との恋愛話”などの小見出しがまとめられた。以下のエピソードからは Asexual であることによって感じている悩みが垣間見える一方で、多様な価値観や他者に対する興味といった A の

パーソナリティ面の影響もうかがえる。

3.5.1. 友人からの異性紹介：Aは「紹介はめっちゃされます。やっぱフリーなんで。」と語った。友人からの異性紹介は、他者に恋愛感情を抱くAにとって「ご飯フレンドみたいな感じで、いい距離感を保てる人」と出会う機会として前向きに捉えられる一方で、「フィジカル的な距離が近い人間なんで、変に勘違いさせて」しまい、『帰るね、ばいばい』っていうのがめんどくさくなってきて」という発言もみられた。Aにとって友人からの異性紹介は、性的対象としてみられうることへの嫌悪感や諦めと隣り合わせの出来事であり、Asexualであるという自覚を強めていると考えられる。

3.5.2. 友人との恋愛話：友人の恋愛話を聞くことについて、Aは「自分の定義の恋愛と違う恋愛をしているから、みんなおもしろい」と語り、肯定的な感情を抱いていた。多様な価値観を認め、違うことを当たり前として受け入れようとするAのパーソナリティが、Asexualである自己の受容へ影響していることが予想される。

まとめと課題

本研究では、Asexual当事者1名のライフストーリーを“Asexualの自覚と受容”の観点から分析することで、自覚に至るまでの変化プロセスや受容に影響する要因を探索的に検討することを目的としていた。語りを整理し、分析した結果、Asexualだと自覚・受容するまでの通時的変化（主に中学時代から大学時代）および、現在におけるAsexualであるという自信や、将来の不安や期待に関連するエピソードが見いだされた。Figure 1にまとめたように、これらのエピソードがそれぞれどのように影響し合うことで“Asexualの自覚、受容”に至ったのか、変化プロセスを考察する。なお、自覚後のAsexualである自己の捉えについては、“Asexualであるという自信”として区別している。A自身もいつから自信がもてたのか、又はどこから自信が湧いてくるのかわからないと述べているため、現在における自己の捉えとは分けて扱うこととした。

Asexualであると自覚するまでのプロセス

Asexualであると自覚するまでのプロセスにおける第一段階としては、交際等の経験を通じて周囲の価値観や考え方のギャップを認識することがあげられる。恋愛観や付き合うということへの認識のギャップが、友人や交際相手との間に生じることで、性的欲求を他者に抱かない自身に気付くきっかけが与えられ、違和感や疑問が生じると考えられる。Aの場合は、特に高校時代の交際によって、親友や交際相手との間にギャップを感じる機会があり、違和感や疑問が生じていた。しかし、交際経験があったとしても、発達段階によっては違和感や疑問は生じない可能性がある。実際に、Aは中学時代の交際時には高校時代ほど強く違和感や疑問を抱いていなかったことがうかがえる。また、周囲の環境や交際相手のパーソナリティなどによっても、ギャップが生じず、違和感や疑問を抱かない可能性はある。ただし、現代の日本においては年齢があがるほど結婚や子どもを産むことに関する話題にふれやすくなることが予想される。加えて、マイノリティであるがゆえに、本人が自覚していない段階では、他のAsexual当事者と出会い意見を聞くことができる確率は低いと考えられる。このような環境ではマジョリティの価値観が大きな影響を及ぼすと考えられるため、違和感や疑問が生じる年齢に個人差はあっても、必ず経験するプロセスであるといえるだろう。

第二段階としては、Asexualという用語を知る、もしくは他のAsexual当事者の存在を知ることがあげられる。第一段階において生じた違和感や疑問は、自身について考える機会をもったということでもある。どのようなときに違和感を抱くのか、なぜ違和感を抱くのか、自分が子どもであるだけなのか、他にも自分と同じような人がいるのかなどについて考えることは、当事者を次の段階へと誘導する。すなわち、違和感の原因を知り、疑問を解決するための行動が生じやすくなるのである。学問的知識や他の当事者の存在は、客観的な情報として当事者の自覚を促すだろう。もちろん、第一段階の前に、第二段階を経ていることもあると考えられる。しかしその場合は、自身に当てはめて考えないため自覚には至らない可能性が高いと思われる。また、違和感や疑問を抱いていれば、積極的に行動を起こさない場合であっても、関連情報について敏感になっているために、書籍やインターネットなどで取りあげられているAsexualの関連情報に目が留まりやすくなることが予想される。しかし、日本では性的マイノリティの中でもさらにマイノリティであるAsexualについては、国内論文の少なさからもわかるように現在でもほとんど取りあげられていない。性的欲求や行為については非常にプライベートな問題であり、公的な場で話題に出すことは忌避される傾向にある。このことから、日本では当事者自らが積極的に行動を起こさな

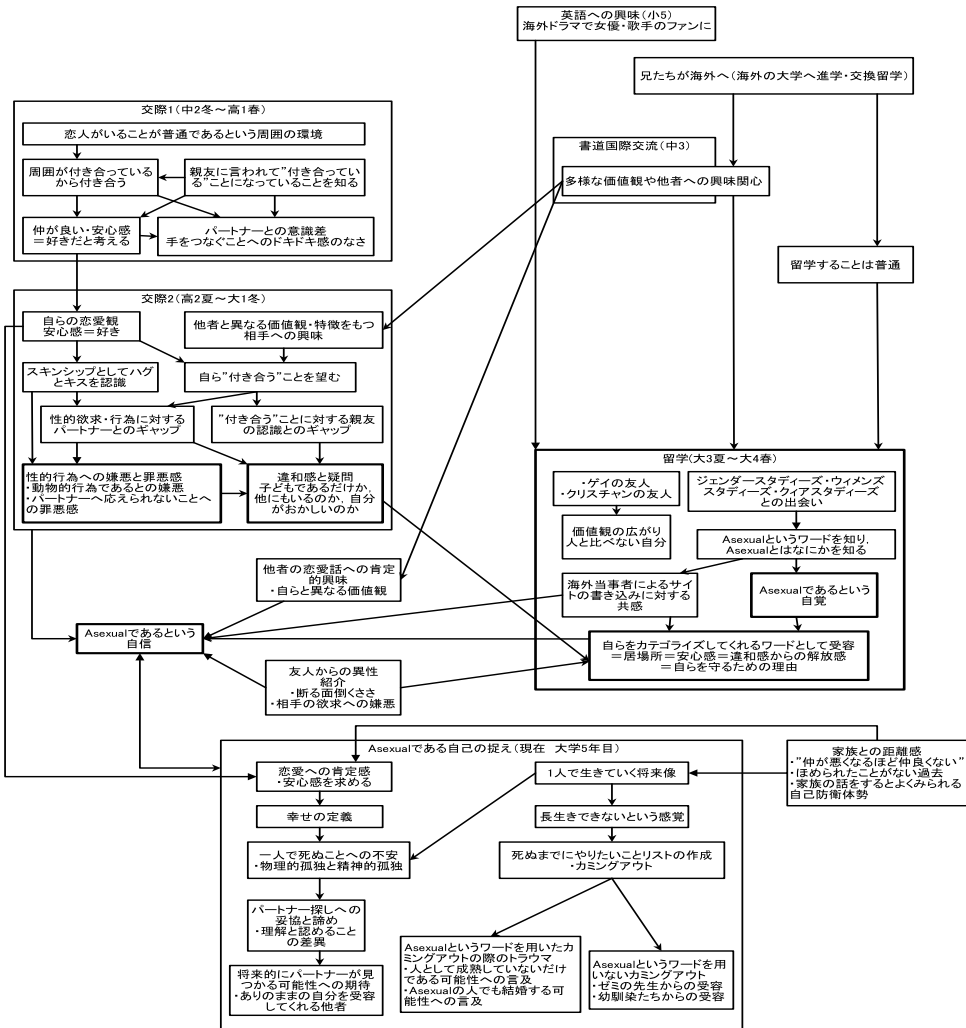


Figure 1 Asexualに関連したエピソードの模式図

注) 括弧の中は当時の学年を示しており、基本的には上から時系列に沿って並んでいる。

れば、Asexual という用語や他の当事者にたどり着くことは困難であると考えられる。A の場合、留学前には LGBT+について知っていたものの、特に調べたことはなかったという。留学によって、情報を得やすい環境への移動があったことで、クィアスタディーズまで深く学ぶ機会を得て、Asexual という用語を知ることができたといえる。この A の留学には、小学生のころに芽生えた英語への関心や書道国際交流体験、兄たちの影響があると考えられ、A 固有の特徴であるといえる。今後 A 以外の事例についても収集し、Asexual 当事者がどのようにして Asexual という用語や他の Asexual 当事者の存在を知ったのかを検討する必要がある。

Asexual であることへの自己受容

A は自覚と同時に“解放感”や“安心感”といった感情を感じており、その際にある程度の受容はなされたと捉えられる。他の性的マイノリティ当事者の中には、同性愛嫌悪を抱いているために自己受容が妨げられている場合もある。このことから Asexual であることへの自己受容についても、Asexual についての偏見や差別意識が当事者自身にあるほど受容しがたくなることが予想される。A の場合は、多様な価値観や他者に対する興味を抱くというパーソナリティ面の影響もあり、性的

マイノリティに対して偏見や差別はあまりもっていなかった。そのため、Asexual であることに対しても受容しやすい土台ができていたと考えられる。他方で、Asexual の定義は、性的欲求が他者に向かないことであり、絶対にないということは証明できないとも考えることができる。すなわち、そもそも偏見や差別意識がある場合には自身を Asexual であると自覚しない可能性が高いといえる。したがって、Asexual の場合は、自覚と受容は同時になされることが多いと推察される。この仮説についても、より多くの Asexual 当事者を対象に調査を行なっていく必要があるだろう。

本研究の意義と今後の課題

本研究は、Asexual 当事者に焦点をあて、ライフストーリーを“Asexual の自覚と受容”の観点から整理することで、これまで国内で明らかにされていなかった Asexual の自覚プロセスや研究を行なっていくうえで着目すべきポイントを明確にした。また、Asexual であることを自覚し受容することで、当事者は解放感や安心感を抱いていたことから、他の性的マイノリティと同様に Asexual についての知識や当事者の存在についても教育の場等で言及されることが望ましいといえるだろう。しかし、本研究で扱った事例は 1 名のみであり、個人の特性による影響も大きい。問題と目的でも述べたように Asexual は、性的欲求そのものがないのか、他者に向かないだけなのか、恋愛感情はあるのかないのか、恋愛志向 (Romantic orientation) はなにかといった点において、当事者間でも多様性がみられる。したがって、本研究はあくまでも A の事例を基にした萌芽的研究の域を出ず、更なる研究の積み重ねが求められる。

謝辞

本論文の作成にあたり、面接に快く応じてくださった A さん、対象者探しに協力してくださった LGBTs 大学生当事者サークルのみなさまに対し、深く御礼申し上げます。

引用文献

- Bogaert, A. F. (2004). Asexuality: Prevalence and associated factors in a national probability sample. *Journal of Sex Research*, 41, 279-287.
- Bogaert, A. F. (2006). Toward a conceptual understanding of asexuality. *Review of General Psychology*, 10, 241-250.
- Dietch, J. (1978). Love, sex roles, and psychological health. *Journal of personality assessment*, 42, 626-634.
- 返田健. (1986). 青年期の心理. 教育出版.
- 北原香緒里, 松島公望, & 高木秀明. (2008). 恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響. 横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育科学, 10, 91-114.
- 高坂康雅. (2011). “恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討. 青年心理学研究, 23, 147-158.
- 高坂康雅. (2013). 青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達との関連. 発達心理学研究, 24, 284-294.
- マーデル・アシュリー. (2017). 13歳から知っておきたい LGBT+. 須川綾子訳, ダイヤモンド社.
- 内藤哲雄. (1994). 性の欲求と行動の個人別態度構造分析. 実験社会心理学研究, 34, 129-140.
- Storms, M. D. (1980). Theories of sexual orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 783-792.
- 若尾良徳. (2006). 異性との交際のない若者の増加. 齊藤 勇 (編), イラストレート恋愛心理学, p.43. 誠信書房.
- 吉岡真梨子・坂谷佳祐. (2017). 教員養成課程学生の性的マイノリティに関する知識量及び正答確信度を規定する要因の検討. 学習開発学研究, 10, 157-164.